

助詞「は」の習得
—主題化の発達過程を探る—

伊藤聖子

日本語学習者にとって助詞の習得は難しいとされ、その習得に関する研究が多くなされた。中でもとりわけ多くの研究がなされたのが「は」と「が」についてである。その背景には、主語と主題を区別できていないこと（八木 2000）や、「は」が「が」の代行業を最もしやすい（三上 1960）といったことがあると考えられる。

しかし、助詞「は」が主題化できるのはガ格で表される内容のみではない。他の格助詞で表される内容についてもガ格の内容と同様に主題化することが可能である。しかし、他の格助詞で表される内容を主題化できるかどうかについては、あまり議論されてこなかった。学習者は「は」と「が」の対立のみで助詞「は」の使用が難しいと考えているのであろうか。さらに言えば、主題化という働きそのものが、第 2 言語習得過程においてどのように発達するのかという点についても議論が進んでいない。

そこで、本研究では「は」と「が」に限らない主題化の発達過程を明らかにすべく、KY コーパス、空欄補充調査を用いて調査を行った。本調査で具体的に明らかにしたいと考えた研究課題は以下の 2 点である。

①「格助詞+は」の使用はどのように変化していくのか

②助詞を選択する際の選択理由において、主題化の発達が進む理由と進まない理由にはどのような違いがあるのか

研究課題 1 を明らかにすべく、KY コーパスを使用して調査を行った。分析の対象としたのは中国語を母語とする学習者の初級から超級までのすべてのデータである。その使用例すべてから、非用や分析の対象外となる用例を除外し、さらに慣用句的な表現についても除外して考察を行った。その結果、「には」が早い段階から突出して多くの使用が見られ、次いで「では」、そして「とは」「からは」「までは」の産出が確認できた。「へは」の産出は超級においても確認できなかった。また、産出が確認できたものでも、中級、上級では指示詞との使用や、慣用表現に近い文型で使用されることが多かった。

また、研究課題 2 を明らかにすべく、中国語を母語とする日本語学習者に対して、空欄補充調査を行い、その選択理由、確信度についても記述をしてもらった。その結果を、主題化できる場合、できない場合に分け分析を行うことで、どのような選択理由が主題化の発達を遅らせ、どのような選択理由が主題化の発達を促すのかについて分析を行った。これまでの研究では主語と主題の混同が問題視されていたが、混同していても先行の名詞句を主題化できることがわかった。一方、動詞や格助詞の意味に注意が向くと、主題化しないということも明らかとなった。

以上の結果をもとに、「が」に限らない格助詞で表される内容の主題化、及び主題という働きそのものの発達過程について主題仮説の主張が日本語においても支持されるのかについても考察を行う。